

【種の準備、芽出し】5月上旬

いよいよお米づくり開始。種まきの前に「芽出し」をします。平たい容器に水を薄く張って、種もみを入れます。水は毎日替えて酸素不足にならないようにしましょう。浸種の積算温度（水温×日数）の目安は100度。20度なら5日間が目安。小さな芽が出てきたら、種まきです。



種もみ・鳩胸



芽出し

【土づくり、移植】5月上旬

バケツに土を入れて種まきをします。使う土は広げて乾かしておきます。用意した土は水とよく混ぜ、表面に溜まらない程度の水を入れて、芽出しした種をまきます。種もみ二つほどを6~7ミリの深さに指で押し込んでいき、土を被せたら完了。表面が乾いたら水をかけて、芽が土から出てくるのを待ちます。



土づくり



バケツへの移植



【芽生え、植え替え】5月中旬～下旬

稻作は「苗半作」と言われるよう、元気な苗選びがのちの生育の良さにつながります。葉が3、4枚に増えたら植え替えの時期。茎の太い苗4～5本を選び、まとめてバケツの真ん中、2～3cmの深さに植えます。この時の水の深さは1cm程度です。植え傷みから回復し、再び生長が始まり活着します。数日して根付いたら、3～5cmほどの深さに水を張ります。次第に分けつも起こります。



芽生え



植え替え

【水張り、分けつ】6月上旬

水を1cmの深さに張って、数日して葉っぱが新たに伸び始めたら、根付いた印。根付いたら5cmの深さで水を張ります。

苗を移し替えて水を張ると、茎が増えていく「分けつ」が進みます。稻は茎の真ん中に空いた穴から酸素が通るため、酸欠状態の水の中でも生育できます。そのような仕組みのない多くの雑草は枯死するため、水を張ることで雑草を抑制できます。



水張り



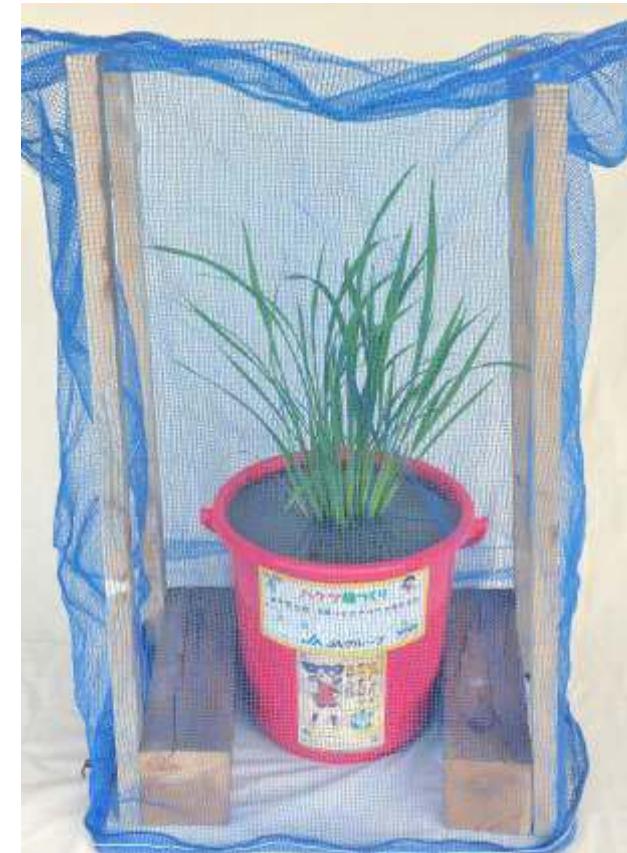
分けつ

【鳥害対策】6月上旬以降

茎がどんどん増えていきます。稻が水をよく吸うので水を切らさないように注意しましょう。稻の穂が出てくる前に、網目の細かい鳥よけのネットを設置します。穂が出てきてもネットに当たらないように、稻の周りに余裕をもって設置しましょう。



生育状況全景



鳥害対策（ネット設置）

【番外編：雑草取り】 6月上旬以降

水を張ってしばらく経つと、雑草が生えてきます。稻が育つのに邪魔になるかもしれないので、見つけたら取り除きましょう。今回は「コナギ」という雑草がたくさん生えてきました。



雑草



雑草除去後

【番外編：バケツの生き物】 6月上旬以降

バケツ稻を作っていると、たくさんの生き物が集まってきます。溜めた水の中をよく見てみると、アマガエルのオタマジャクシを見つけました。バケツ稻に卵を産みに来ていたようです。この他にもイトミミズがたくさんいました。バケツ稻を作ると、そこはたくさんの生き物が育つ小さなビオトープになります。



オタマジャクシ



糸ミミズ

【中干し】 7月中旬

植え替えから1ヶ月ほどたち、稻株の茎が20本ほどに増え、草丈が40~50cmになったら水を抜いて「中干し」をします。土の表面にうっすらひびが入るくらいが目安です。土の中に酸素が供給され、根は縦方向に伸長し地上部の生育も良くなります。ただし気温が35度を超えるような猛暑が続く時は控えてください。バケツだと容量が小さいので乾き過ぎ、稻が水を吸えなくなり枯れてしまうことがあります。



中干し

【番外編：葉先の水滴】

夕方から早朝、バケツ稻の葉先に小さな水玉がついていることがあります。これは稻が吸い上げた水を葉っぱの先から出したもの。稻が元気に育ち、根っこから水をしっかりと吸い上げている証拠です。



【高温対策】7月下旬～

梅雨明け後の猛暑は、バケツ稻にもダメージを与えます。そこでバケツの部分をござで覆って直射日光を遮り、暑さをしのげるようになりました。また溜めている水はすぐに温まってしまうので、水が熱いときは水を捨て、冷たい水に入れ替えます。バケツはコンクリートの上より地面の上に置くのもおすすめです。実際の稻栽培では、高温の年でも品質が良いとされる高温耐性品種の導入が各地で進められています。



【害虫対策】7月下旬～

7月から8月になると稻の葉を食害する虫が現れます。代表的なのが、チョウの仲間のイチモンジセセリ（イネツトムシ）の幼虫です。葉をつなぎ合わせた「ツト」と呼ばれる筒状の住処を作つて畳はそこにこもり、夜に食害します。他にも、根元に潜む「クサシロキヨトウ」の幼虫や、穂が出たときに穂の汁を吸つて害を与えるカメムシの仲間がいます。今回は「ウズラカメムシ」がいました。カメムシが吸つた穂は斑点米と呼ばれる変色した粒になつてしまひます。いずれも見つけたら取り除きましょう。



イチモンジセセリの幼虫



イチモンジセセリのさなぎ



ウズラカメムシ

【出穂】 8月

8月に入ると、いよいよ穂が出てきます。穂は一本の茎から一本ずつ出てきます。

穂が出てきてからお米が充実してくるまでの期間は、最も水が必要な時期。たっぷりと水を入れましょう。暑い日は水が早くなくなってしまうこともあるので、こまめに確認して、水を切らさないようにしてください。



【開花】8月

穂が出てきた直後、開花が始まります。晴れの日は朝から午前中に開花するが多く、わずか1、2時間で終わります。穂が出始めのときはカメムシ類が穂を吸いに来るので、ネットをかけるなど注意します。穂が開いて、中からおしべが伸びているのが開花のしるし。稻はほとんど自家受粉で、開花したときにはすでに受粉が終わっています。受粉すると、いよいよお米ができあがっていきます。穂の中で玄米ができあがってくると、重さで穂が垂れるようになります。



【雑草】8月～

穂が出てくる頃に目立つ雑草に「イヌビエ」と「クサネム」があります。雑草は稻から光や養分を奪い、収量を低下させます。「イヌビエ」などヒエ類はこの時期に水田で穂がついているのがよく見られます。

「クサネム」はマメ科の雑草で、小さな豆をつけます。他にもイネ科の「メヒシバ」など、近くに生えている雑草が侵入することがあるので、いずれも見つけたら取り除きましょう。



イヌビエ



クサネム



※バケツの中に該当の雑草が生えていなかったため、水田の雑草写真（ご参考）

【害虫】8月～

穂が実ってきても、依然として害虫には気が抜けません。糲（もみ）が膨らみ始めると集まつてくる代表的な害虫がカメムシの仲間です。植物の汁を吸って暮らしていますが、稻の糲を吸うと、玄米の一部が黒く変色してしまいます。今年は「イネカメムシ」という種類を中心に、様々なカメムシが大発生しています。イナゴやガの幼虫が葉を食べることもあります。害虫は見つけ次第、取り除きましょう



イネカメムシ



イナゴ

【番外編：その他の虫】8月～

バケツ稻を作っていると、害虫以外にもさまざまな虫が集まってきます。赤とんぼの仲間「ノシメトンボ」は田んぼで生まれ育ち、秋に再び田んぼで卵を産みます。害虫を食べる代表的な益虫は蜘蛛の仲間。「ドヨウオニグモ」は葉の間に巣を張って、獲物を捕らえます。



ノシメトンボ



ドヨウオニグモ

【穂の色づき】 8月～

8月上旬に出た稻穂は、だんだんと粒の中にでんぶんがたまって重くなり、上方から垂れてきます。日ごと色づき、9月に入る頃に黄金色に変わってきたら間もなく稻刈りを迎えるし。刈り取りの時期は出穂から40日ごろ。目安の1つは穂の色です。穂についている穂が8～9割ほど黄金色になった頃が刈り時です。



【落水】9月～

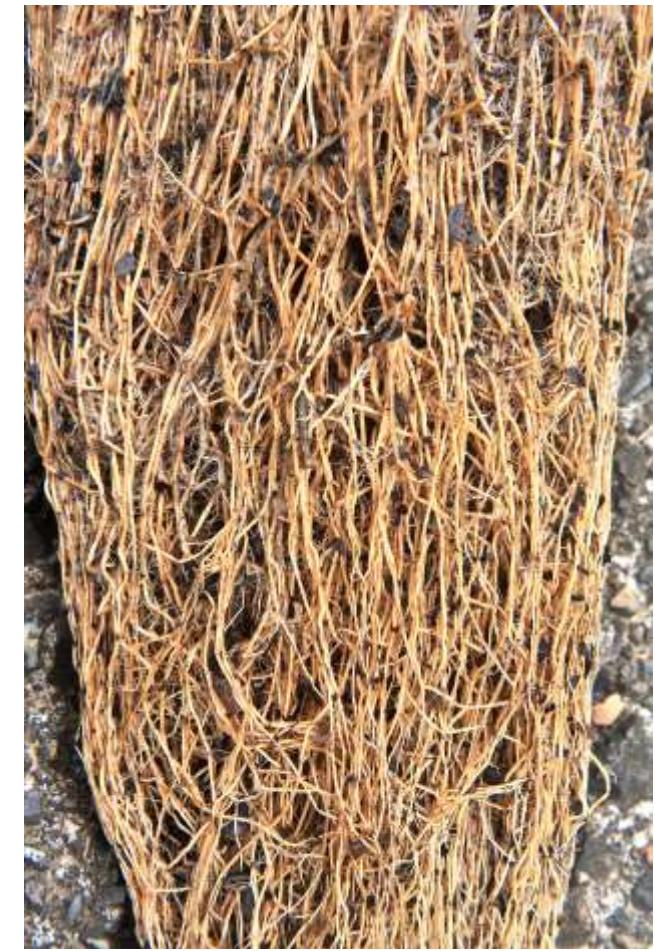
稻刈りの目安は穂が出てから40～45日ほど。収穫予定日の10日ほど前に水を抜く「落水」を行い、バケツに水をためないようにして、土を乾かし気味に管理し収穫に備えます。ただし落水が早すぎると土が乾燥して不完全米やくず米が増え、遅れると穂が倒れる倒伏の原因となり、お米の質が悪くなるので注意が必要です。



稻刈り前の水位

【おまけ：バケツ稻の根っこ】

稻刈りを迎えたバケツ稻の根っこを取り出してみました。バケツの中いっぱいに根が広がっています。根を洗ってみると、長さは80センチほどにもなりました。お米の実りは根っこが支えていたことがよく分かります。



【稻刈り】9月～

種まきから150日経ち、穂の9割が黄金色になつたら収穫です。ハサミや鎌で株元から刈り取ります。刈り取った稻は紐で縛り、風通しの良いところで稻を逆さまに干す「はざかけ」を10日ほど行います。乾かしている間も稻の葉や茎から穂へ栄養が送られ、お米は美味しいくなっています。その光景は秋の風物詩でしたが、今はコンバイン収穫や乾燥機使用がほとんどです。



【脱穀・糀摺り・精米】9月～

稻穂から糀をとる「脱穀」は、割りばしで穂をしごく他、さかさまにした茶碗に穂を入れて引っ張る方法があります。糀摺りは杵と臼で行いましたが、すり鉢とすりこぎ棒でもできます。糀殻は息を吹きかけて飛ばします。糀を取った状態のお米を「玄米」と言います。玄米を瓶に入れ、すりこぎ棒で上下につくと精米できます。1つのバケツ稻からできた糀は150グラムでした。



脱穀



糀摺り